

「五反田」という凡庸な名前の付け方——。
きつと五反田は目黒・品川から流れてくる
気まぐれなトレンドに「こ」にでもしてくれよ」と
開き直っているのだと思う。

五反田は「こはんだ」とは読まない

五反田は「こはんだ」と読む。「こはんだ」と読む人がいるといけないので、あらかじめ注意を促しておく。

「何をわかりきったことを」

と思っただ人もあるだろうが、あなたは間違っている。「五反田」が「こはんだ」であるなんてことは、狭い地域内だけで通用している偏頗な知識に過ぎない。知っていて偉いわけでもないけれど、知らないからと恥じ入るような問題でもない。

こんなことを言うのは、私自身、大阪にいた時分、地名でずいぶん苦労をしたからだ。

私は「交野」を「うの」と読んだ。「豊島」は、当然「としま」と読んだ。「枚方」だって自信満々で「まいかた」と発音した。しかし、正解は、「たての」であり「てしま」であり、「ひらかた」であった。

「おい、まいかたやて」
と大阪人は笑った。

「さすが関東の人は考えることが独創的だな」と彼らは言った。

しかし、考えてもみてほしい。

東京に生まれ育った人間である私には、「本町」が「ほんまち」であることや「日本橋」を「にっぽんばし」と読むなんてことは、到底思いも及ばないことだったのだ。梅田新道が「うめだしんみち」だという話をはじめ聞いた時、私は、

「だまされてたまるものか」

とさえ思ったのだ。それほど、大阪の地名は予断を裏切るものだったのである。

東京の地名だって、虚心になって考えてみれば相当にひねくれている。

たとえば、「秋葉原」が「あきはばら」で「あきはばら」ではないこと、「日暮里」は「にっぽり」と読むべきであること、また、「狸穴」はなぜか「まみあな」と読むことになっていること……こんなのは、本当は誰にだって見当もつかないはずのことだ。

だから、仮に「五反田」を「こはんだ」と読んだ人間がいたとしても、その人の無知を笑うようなまねはすべきではない。我々にしたところで、秋田の地名や鹿児島県の地名については何も知らないのだし、東京の地名だけが特別に重要なわけではない。それに、これはぜひ言っておきたいのだが、東京の地名や都心の地理に詳しいことを自慢に思っている奴がいるのだとしたら、その人間はどうしようもない田吾作だ。なぜって、そいつは、結局のところ東京に憧れている人間だからだ。

田吾作というのは、都市について無知な人間を指す言葉ではない。むしろ、都市の商業主義にまんまとハマられて、妙な具合に都市に詳しくなっている間抜けを、我々は田吾作と呼んでいる。だからこそ、田吾作は、田舎ではなく、東京に多いのだ。

「最近、霞町あたりが面白いんだ」

と田吾作は言う。

そうだろうとも、田吾作は、田吾作が集まる場所が大好きだ。

凡庸であることが才能となる

五反田に話を戻す。

たぶん、五反田には、昔、五反の田んぼがあった

のだろう。というよりも、ここには、五反の田んぼ以外何もなかったに違いない。ともかく、五反田という地名のあつけないばかりの凡庸さに、私は、そうした感じを抱くのである。

実際、五反田は、今に至っても、なんとも凡庸な町だ。「品川つばさ」と目黒つばさの混交とでも言ったら良いのか、いずれにしろ、どこをどう見ても「五反田つばさ」と呼ぶに値するような特徴がないのだ。

駅前には申し訳程度の歓楽街があり、そこには、海沿いから進出してきたケバケバしいキャバレーと、山の手から降りてきたしゃれたカフェバーの類が何食わぬ顔をして並んでいる。少し離れた住宅街には、いまだに築20年以上の木造モルタルの住宅が残っており、そのすぐ隣には、養鶏場みたいなウイークリーマンションや最新のオフィスビルが次々と建設されている。まったく、どんなふうに要約して良いのやら見当もつかない町だ。

きつと五反田は、目黒や品川や白金台の方向から流れてくる気まぐれなトレンドに身をまかせながら、内心「こ」にでもしてくれよ」

と開き直っているのだと思う。

オフィス街にするならするで、そうしてくれれば良いし、ショッピング街にしたいのならそうすれば良い。地上げだって再開発だって町名変更だって、あなたたちのしたいようにすれば良いじゃないか……というわけだ。

要するに、五反田は、東京の他の多くの町と同じく、自らのビジョンや意思のようなものをまるで持ち合わせていない。だから、この町は、周辺のいくつかの隣町の間に埋没し、山の手でも下町でもない、何の個性もない凡庸な顔をしているのだ。そういう意味で、五反田は、無防備で、無批判で、無個性な、最も東京の町らしい町だ。

たとえば、海の水のひとつひとつの分子は、何

の意思も持っていない。それでも、海の水のそれぞれの分子が、隣の分子の動きに影響を受けることによって、結果として海には波が形成される。同じように、東京のひとつひとつの町は、何の行動も起こしていないのに、全体としての東京には、確かにある潮流のようなものが形成されている。そんな中で、五反田は、最も無抵抗に流れに身を任せている、最も典型的な東京の町だと私は思うわけなのだ。

人間も同じだ。

東京では、人間もまた、海の中の一粒の分子みたいな抽象的な存在になる。で、東京に住んでいる人間は、わけのわからないバイブレーションを伝達するための媒体のようなものに成り下がりざるを得ない。

結局、都市というのは、凡庸であることがひとつの才能と見なされるような場所なのだ。それどころか、凡庸は、都市生活者にとって唯一の有効な才能だ。なぜなら、都市という人間の集積場が、そこに集まるひとりひとりの個人に期待する個性

は、不特定多数の他人と似ているということだけだからだ。

多数決民主主義の愚劣

クラシックのコンサートに行ってみると、このことがよくわかる。

なにしろ、演奏が終わって、誰かが拍手を始めるまでの一瞬の間、広い会場が完全な静寂に支配されるのだ。

完全な静寂。

しかも数千人の人間による完全な静寂、だ。

この観客たちの統一の完璧さは、ある意味でオーケストラのそれを上回っている。

そして、誰かが拍手をすると、じきに全員が拍手をはじめ、しかも、その拍手の音量と持続時間は、オーケストラの演奏の出来不出来に関わらず常に一定している。

ロックのコンサートだって同じだ。ここでも、観客は、つまるところ一つの人格の別々の分身に過ぎない。誰かが立ち上がると、じきに全員が立ち上がり、誰かがピョンピョン跳ねると、全員がピョンピョンをはじめ、で、アーティストが「フイルオーライ？」と呼びかけると、英語を聞き取れない奴も含めた、数万人の観客のすべてが「イエイ」と叫びながらこぶしを振り挙げる。

きつと、東京というのは、ひとつの巨大な盆踊りの輪みたいなものなのだ。そして、そこでは、踊っている人間のすべてが、踊りの輪に入らない人間を憎んでいる。まるで多数決民主主義の愚劣なパロディーだ。

だから

「生活活劇」

と、CMは言う。

「けつ、活劇生活じゃねえか」

と私は思う。が、どうせ間違っているのは私の方なのだ。



Illustration・Takeuchi Kazuya